

70年代のクルマ好きなあなたのための1冊

2008年11月9日発行

# 昭和モーターズ

NEWS  
MOOK

S30Z  
**保存版**  
オフィシャルカタログ



Vol.1

の子にとって、フェアレディこそ真の憧れ。外車・国産の壁を越えた絶対的な存在だ

## スポーツする青春

# フェアレディ SR311&初代Z



貴重資料 国内/海外版を満載

## 快進撃!

ま手に入れる、あの頃の夢。  
R, Zの現在相場と飼いこなし方。  
型エンジン、魅惑のチェーンナップ  
ス・フェアレディ album  
だわりの年表。  
970年~1975年版  
あの名車、  
の事々」

日本のスポーツカーの性能  
実力を、世界に認めさせた  
DATSUN 240Z。  
そしてミスターK。



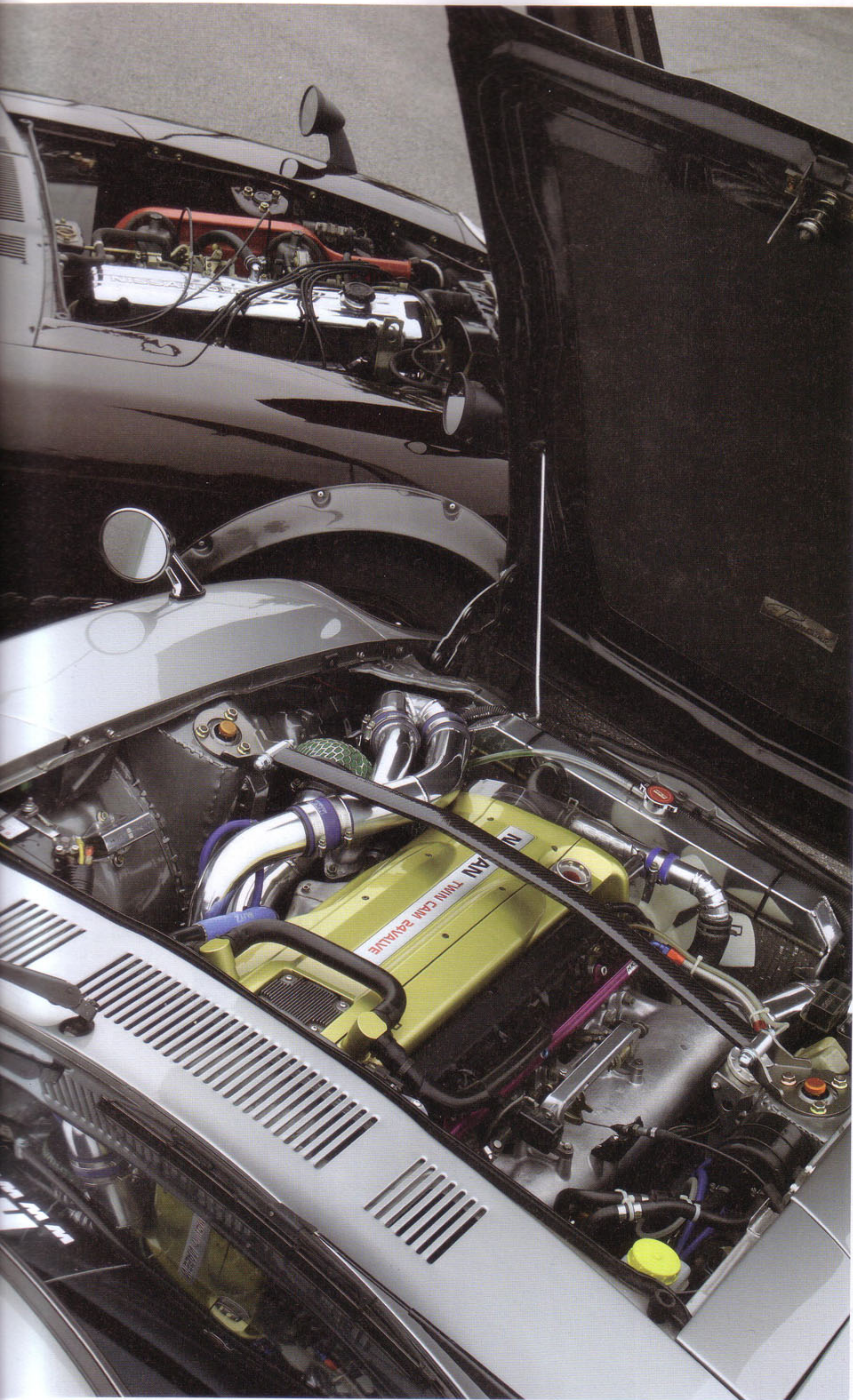
スタルじじいの、昭和アーカイブ・・・Vol.1

「アニキ～」の声が聞こえる。傷だらけの天使



# 現代のエンジンを選ぶか オリジナルにこだわるか

ヒストリックカーを楽しむための、ロッキーオートのふたつの提案  
オーナーの志向に合わせて、モダンな装備を得ることもオリジナル遵守も可能に



あの当時、憧れたクルマを今、体験してみたい。不意に起こるトラブルに悩まされることなく安心して心ゆくまで走らせることができれば、どれほど楽しいことか……。

そんな要望に向けて、ロッキーオートが提案したのは、現代の直列6気筒エンジン、RBユニットの換装だったL型フルチューンに匹敵する性能を、安定したコンディションで発揮するコンプリートカー。

それを制作できるのは、オリジナルのレストアへの豊富なノウハウの蓄積があるからに他ならない









対向ピストンキャリバー、アラゴスタのサスペンションを活かせるのはボディの補強アップによる。



リアまわりも同様にハードに仕上げた設定。フルチタンのエキゾーストパイプの美しさにも注目して欲しい。



フロントには大型のインタークーラーが見える。ツインターボで武装したエンジンのすごみが伝わる。



ワークのホイールはかなりの待ち時間を費やした特注品。大幅に増したパワーを伝えるパーツの部



シートはホールドを増したレカロのバケットタイプを装備。オリジナルのシートではやはり、このクルマには心許ない。



形状はオリジナルに近いが、カーボン製としたリアスポイラー。さりげなく現代の素材を使用している。



ヘッドライトはHID化されている。これもハーネス類からきちんと作られた電装系の信頼度があればこそ。



車載工具はスナップオンの限定セット、ジャッキは最近製造が終了した名品、カヤバのシザースを載せている。



助手席の前のスペースを利用して取り付けられたハードディスクタイプのカーナビゲーションで、快適なドライブが可能。



ステアリング下にはETCのユニットをさりげなく装着。高速道路を利用時のクルージングにはやはり便利だ。



み、また究極のフテレレイズを手にするに相応しい立場となったI氏がロッキオートの門をくぐったのだ。  
そうして手に入れた愛車だけに「とにかく満足しています。このクルマのためにガレージも作ってしまったし、一生乗り続けます。将来、子供が免許を取ったら譲ってあげたい気持ちです」という。そこで、もしオートマ限定免許を取つて来たらどうしますか、と聞けば「大丈夫。そのときはロッキオートに頼んでオートマに載せ変えてもらいますから」と即答。まさにユーザーとショップの厚い信頼関係を見せつけられた。

「一見すると極上のS30フテレレイズと思えるが、よくよく細部を見ていけば、このZが只者でないことは明らか。たとえばワークの特注ホイールの隙間からはGT-Rの対向ブレーキキャリバーが確認できるし、またフロントバンパーの開口部からは大型のインタークーラーが覗いている。そしてカーボンボンネットを開ければ、そこには日産最強の直6エンジンであるRB26ツインターボが鎮座しているといった具合。そのブースト圧は最大1.7kg/cm。数字で示すのは無粋だが、500馬力級のエンジンである。またシャシー面でもボディはフレームを追加したレベルで大幅に強化され、サスペンションはアラゴスタの特注品。まさに現代でも最速の部類に入るマシンへと仕上がっている。  
さて、ロッキオートが製作したこのスペシャルなフテレレイズ。数々のこだわりにより車両価格は1500万円オーバーと、プライスもスペシャルになっているがオーナー氏は、その価格に納得しているという。実際、オーナーのI氏に話を伺えば「都内に住んでいるのですが、そうした条件下でも何の問題もありません。トラブルは皆無ですし、気難しいこともありませんから、まさにスーツで乗れるスポーツカーに仕上がっています。何一つ不満はありません」という。  
現在35歳というI氏、そもそもこういった仕様のフテレレイズを手に入れたと思ったのは高校生くらいまで遡るのだという。「当時『湾岸ミッドナイト』という漫画を見て、初代フテレレイズの姿に魅了されました。だからショートノーズなのです」とはいえ旧車ゆえに、実際に速さまで求めるのは難しいと考えていたそう。そうして憧れる気持ちが高ぶっていく中で、ロッキオートの存在を知ったのが10年前。そして今年、クルマ経験も積

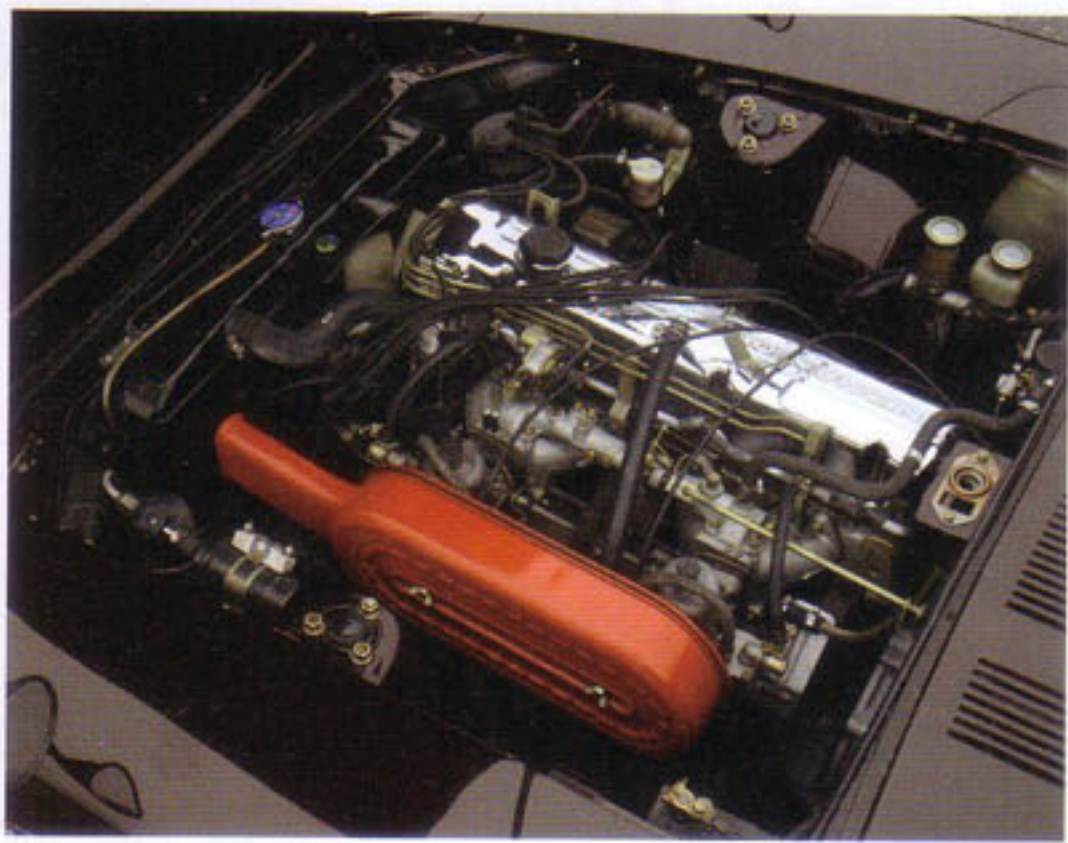
「一見すると極上のS30フテレレイズと思えるが、よくよく細部を見ていけば、このZが只者でないことは明らか。たとえばワークの特注ホイールの隙間からはGT-Rの対向ブレーキキャリバーが確認できるし、またフロントバンパーの開口部からは大型のインタークーラーが覗いている。そしてカーボンボンネットを開ければ、そこには日産最強の直6エンジンであるRB26ツインターボが鎮座しているといった具合。そのブースト圧は最大1.7kg/cm。数字で示すのは無粋だが、500馬力級のエンジンである。またシャシー面でもボディはフレームを追加したレベルで大幅に強化され、サスペンションはアラゴスタの特注品。まさに現代でも最速の部類に入るマシンへと仕上がっている。  
さて、ロッキオートが製作したこのスペシャルなフテレレイズ。数々のこだわりにより車両価格は1500万円オーバーと、プライスもスペシャルになっているがオーナー氏は、その価格に納得しているという。実際、オーナーのI氏に話を伺えば「都内に住んでいるのですが、そうした条件下でも何の問題もありません。トラブルは皆無ですし、気難しいこともありませんから、まさにスーツで乗れるスポーツカーに仕上がっています。何一つ不満はありません」という。  
現在35歳というI氏、そもそもこういった仕様のフテレレイズを手に入れたと思ったのは高校生くらいまで遡るのだという。「当時『湾岸ミッドナイト』という漫画を見て、初代フテレレイズの姿に魅了されました。だからショートノーズなのです」とはいえ旧車ゆえに、実際に速さまで求めるのは難しいと考えていたそう。そうして憧れる気持ちが高ぶっていく中で、ロッキオートの存在を知ったのが10年前。そして今年、クルマ経験も積





さて、ロッキオオートが仕上げたもう一台のフェアレディZはGノーズの240ZG。これ以上はないほどの完全ノーマル仕様だ。外観でいえばリアスポイラーまで純正品を使用しているほどだ。もちろんエンジンはL型の中でもウェルバランスといわれるL24型を新車以上のコンディションに整えている。フロアカーペットやシートといったインテリア部品も同様。さらにインパネには当時モノの8トラックステレオがセットされているほど。タイヤ&ホイールやショックアブソーバーといった機能部品こそ現代のレベルでモディファイされているが、タイムスリップしたかと思うほどノーマルだ。

こちらのオーナーは自動車関連の会社を経営する富田氏。数年前までは主にフェアリーやポルシェを愛車としていたそうだ。「ああいったスーパーカーはかなりの高速域でないと楽しめません。それに常に最新モデルにアップグレードしたくなるので、長く付き合えないのです」。そこで富田氏のクルマ趣味は180度転換する。「もつとカジュアルに乗れて、ゆつくり走っていても楽しめるクルマ。そう考えたときに旧車が浮かんだんです。とくに若い頃に憧れたフェアレディZの魅力が甦ってきたのです」。



美しい外観からも、コンディションの良さが伝わってくるようなエンジン。納車前に徹底的にチェックするという。

そうしてロッキオオートに飛び込んだのが2年前のこと。しかしスグにクルマを手に入れたわけではない。ここで紹介している240ZGにしても、撮影したのは納車1週間前というタイミングだったのだ。そのわけは富田氏のクルマ哲学にある。「自分としては、どんな旧車であっても走っている途中で止まるというのはあり得ないことなのです。エアコンやパワステといった快適装備がついていないのは納得できませんが、故障で止まるのは美学に反します」。つまり旧車を旧車らしく乗りたい、だがトラブルフリーでいたい。クルマ趣味の大ベテランである富田氏の眼力によって、そうしたリクエストに応えてくれるショップであるかどうか、またその希望の添える個体かどうかの判断に必要だったのが、この2年という時間なのだ。

そして、その結論は……。「クルマ好きの人には信じてもらえないかもしれませんが、このクルマを買うにあたって自分の目でクルマの状態をチェックしたりはしていません。渡辺代表が『大丈夫ですよ』と太鼓判を押してくれたので安心して決めました」というほどの絶大な信頼関係が築かれている。



オーナーの富田英次氏。納車されたらまず行きたいのは山、ワインディングを楽しみ、駐車して遠くから愛車のフォルムを楽しみたいと語ってくれた。